

大気中オゾンへの曝露により脳出血のリスク上昇

大気汚染物質への曝露と頭蓋内出血の発症との関連については一貫した結論が得られておらず、また脳卒中の種類別のデータもほとんどない。本研究では、米国の脳出血の患者を対象に、脳出血の発症前の大気汚染物質への曝露状況と脳出血発症との関連について検討した。

米国ボストンのマサチューセッツ総合病院で脳出血の治療を受けた患者 577 例（深部脳出血 295 例、脳葉内出血 282 例）を対象に 2006～2011 年の大気汚染物質への曝露状況を調べた。その結果、大気汚染物質のうち、微小粒子状物質（PM2.5）や黒色炭素、二酸化窒素への曝露の増大による脳出血リスクの上昇はみられなかった。一方、オゾン^(註)による汚染レベルが高いと脳出血リスクは上昇した。また、脳出血の部位による層別解析では、脳葉内出血はオゾン汚染レベルと関連がみられた（オッズ比 1.62）が、深部出血では関連がみられなかった（オッズ比 0.88）。さらに、脳アミロイド血管症の患者ではとくに脳出血リスクが高かった（オッズ比 2.23）。

したがって、大気汚染物質のうち、オゾンへの曝露により脳葉内出血を発症するリスクが上昇する可能性が示唆された。

（註）オゾン…光化学オキシダントの主成分。排気ガスなどの大気汚染物質と紫外線が反応することにより発生する。

出典：Stroke. 2018; 49: 2764-2766.